

強者の戦略

こんにちは、日本史の岡上です。昨年度に引き続き、今年度も「東大日本史のみかた」を連載していくことになりました。よろしくお願いします。

さて、最新の東大入試の日本史の問題、もうみなさんはみられましたよね。第1回の時も書かせてもらったように東大の日本史は教科書の内容を基本に置きながらも、教科書には十分に記述しきれていないような歴史学的な見地に立った出題がなされるわけですが、最新の問題も然りという感じでしたね。そこで、今年度も最新問題の解説と、その問題の根底にある「東大が受験生に問いたい（知っておいてもらいたい）日本史」について考えていきたいと思ひます。

第5回となる今回は 2010 年の東大日本史の第1問を取り上げてお話をしていきたいと思ひます。さあ、1週間、しっかり問題を考えてみてください。

【2010 年度 東京大学 文科前期 第1問】

次の(1)～(4)の文章を読んで、下記の設問に答えなさい。

- (1) 大宝律令の完成により官僚制が整備され、官人たちは位階や官職に応じて給与を得た。地方には中央から貴族が国司として派遣され、『万葉集』には、上級貴族の家柄である大伴家持が、越中守として任地で詠んだ和歌がみえる。
- (2) 10世紀には、地方支配のあり方や、官人の昇進と給与の仕組みが変質し、中下級貴族は収入の多い地方官になることを望んだ。特定の中央官職で一定の勤続年数に達すると、国司（受領）に任じられる慣例も生まれた。
- (3) 藤原道長の日記には、諸国の受領たちからの贈り物が度々みえるが、彼らは撰関家などに家司（家の経営にあたる職員）として仕えた。豊かな国々の受領は、このような家司がほぼ独占的に任じられ、その手元には多くの富が蓄えられた。
- (4) 清和源氏の源満仲と子息の頼光・頼信は撰関家に侍として仕え、その警護にあたるとともに、受領にも任じられて物資を提供した。頼信が平忠常の乱を制圧したことなどから、やがて東国に源氏の勢力が広まっていった。

設 問

10・11世紀の撰関政治期、中下級貴族は上級貴族とどのような関係を結ぶようになったのか。その背景の奈良時代からの変化にもふれながら、6行以内で述べなさい。